



2019年2月号
第384号
bestopia.jp

パリ通信
第86号

恩師の召天

2019年2月23日、恩師滝沢陽一先生が召天されました。覚悟はできていましたが、26日茶毘にふされお骨に、私の目にも惜別の涙があふれました。

1月30日に病院にお見舞いしたときは、座って「退院したら、読む本が待っている」と回復意欲をもたれていましたが、2月20日危篤の知らせで駆けつけたときは、やっと目を開いてくださった。体を擦りながらしばらくの時を共に過ごさせていただいた。59年間のご指導には感謝の言葉がありません。告別式には謝辞を述べる機会を頂きました。まとまりません。ベストピアは自分の記録です。又、遠くにいる友へのメッセージです。残したいと思います。

感謝のことば

私たちの教会には70年近く陽一先生のご指導を得てこられた方がおられます。

又、私を知り得ません多くの方々の中には、それ以上の長きに渡り、ご親交のあられた方々がおられます。

わたしたの心に浮かぶ感謝の思いは、空の星のように、数知れず、心の内に輝いております。皆さまの思いを一つに合わせて、万感の思いをこめて、申し上げます。

「滝沢陽一先生、長い間、本当にありがとうございました」

滝沢陽一先生のお働きは、本日皆さまにお配り致しました、略歴の内容以上に、広く周知されておられますが、受洗から59年間、親しくご指導頂いた、ひとりとして、七つのことを述べさせて頂きます。

(1)まず、第二次世界大戦前後のことです。

戦災の悲惨さ、神奈川教会の焼け落ち、日本各地の激しい被害にたいして、やるせない憤りを露わにされておられましたが、ご自分自身については、初めての学徒出陣にもかかわらず、海軍を選んだ為に、直ちに戦地には送られず、国内を転々とさせられ、敗戦を福岡でむかえ、誰よりも早く横浜に戻ることができ、その10月には青山学院中学部の英語教諭になり、その恵まれた俸給で神奈川教会の復興に貢献できたこと。それは、奇蹟の連続であり、同僚や他の方々には、申し訳なく思いつつ、有難いことであったと深く感謝をされていました。

この関連のお話の中にはいつも、お母様が、つね日頃、繰り返し繰り返し唱えられておられていた、聖書のみ言葉がありました。

「主の山に備えあり。母は口癖のように『エホバエレ、エホバエレ』と口ずさんでいた」とお聞きしました。そして、このお母様からの信仰の影響については、同年輩である遠藤周作さんと対比しておられたように私には感じられました。

「明日のことを思い煩うな」、「行き先が分からずに出ていったアブラハムのように、従順に神を礼拝しなさい」と力強く説かれた源は、幼い時に根づいていたように思います。そして、それは、最初の個人誌「エベネゼル」（主は今に至るまで、我らを助けられた）に発展しました。

(2)次に「礼拝」について、

陽一先生は少年時代から礼拝に強く心を惹かれておられ、1961年3月、先生38歳の時に、レイモンド・アバの「礼拝」を翻訳し出版されました。そして、その年の9月から神奈川教会で「主日礼拝書」による式文礼拝が始まり、相模原南教会では1987年10月から始まりました。この礼拝様式は2006年10月、日本キリスト教団定期総会において定められた「主日礼拝式A」に実を結ぶことになり、陽一先生が40年以上待ち望んでおられたことが実現し大変喜ばれました。

このように、鋭い先見性をもっておられましたので、先駆者として理解されない苦しみをしばしば味わい忍耐されておられました。

(3)なめらかな翻訳

陽一先生は「自分は学者ではない」と深く自覚され、著作をお書になりませんでした。幅広い知識と洞察力をもたれ、翻訳には精力的に取り組まれ、特にウイリアム・バークレイには、その人生に共感し精通され、45歳の時に「明日への祈り」、2年後に「新約聖書のギリシャ語」を、そして、52歳の時には、我が生涯の信仰の歩み「奇跡の人生」を訳され、ご自分の人生を重ねておられました。他にも多数の翻訳がありますが、「奇跡の人生」は1992年、「新約聖書のギリシャ語」2009年に再版され陽一先生の晩年に一層の喜びと輝きをもたらしました。

(4)個人誌について

個人誌は鎌倉教会時代の1976年3月から「エベネゼル」を16号、相模原南教会に移ってからは毎月「ぶどう園通信」を158号、70歳からは「葡萄園」と改名され、7年間に渡り、創世記からヨハネ黙示録まで簡潔に、且つ、時代にあった解説がなされ、私のような初心者にはうってつけの導きの通信でした。個人誌はその後85歳に14号、発行され読者を励まされました。(通算280号)

(5)相模原南教会へのお働きについて、

1979年、56歳の時に導かれて当時、伝道所であったこの地にこられました。佐藤邦海牧師を助け相模原南教会とされ、教会堂の大改築を行い、今日の教会があります。

1986年、佐藤牧師は引退と同時にヘブライ語を学ぶ為に、単身イスラエルに赴かれ、

1週間後の8月29日客死されました。その遺体の引き取りに陽一先生と私が急遽テロの警戒、厳しいイスラエルに向かい、途中のパリでテロに巻き込まれそうになりながら、うだるような暑さの中、テルアビブ近郊のワイツマン研究所で遺体と対面し、共にエール・フランスで帰国しました。この旅を通して終始威厳に満ちたお姿でことに当たられた陽一先生を間近に体験して、尊敬の念が更に強くなったことを今も鮮明に覚えています。

(6)隠退に向けて

68歳から第一線を退くために川島堅二牧師、松田伸牧師、前田真考(まさたか)牧師、清水窈子(ちょうこ)牧師のご援助を、お願いし、現在の一宮秀禎(ひでさだ)牧師にお導きを頂いておられますが、陽一先生は、これらの先生方に感謝されつつ、先輩牧師として、同じ伝道に励む教職者として、時には無意識・無自覚に、つい、厳しい言葉を発してしまった「覚えざる罪」を感じてしばしば悔恨しておられました。

(7)睦まじかったご夫妻

家庭生活におかれては、ハルエ夫人との円満な家庭生活は、私たちの及ばない模範でありました。自慢のご長男光一さん、快活な香さん、そのお孫さん、曾孫さんに恵まれ、平穩に過ごされておられましたが、6年前の1月にハルエ夫人が突然に召された折には、最愛の人を失われた喪失感を隠すことなく、涙され、深い悲しみの淵からも、ハルエ夫人に篤い感謝をされておられました。ほどなく、香さんのもとへ住居を移され、「香がよくしてくれる。なにからなにまでよくしてくれる。食事も美味しい。孫にも大事にされる。感謝の日々を過ごしている」と私たちが訪れるたび話されました。そして、真に驚くほど数多くの書籍に接して、読書三昧の日々を過ごされておられました。

1月30日お見舞いした折には「退院したら、読みたい本が机の上で待っている」と仰いました。その本は、490頁もある「神についていかに語りうるか」でした。真に最後まで伝道者であられました。

香さんの献身的な看護に包まれて、温かいご家族に見送られて天に帰られました。再び相まみえることができますときには、

「先生のお陰で、こんなに素晴らしい人生を過ごすことができました」と報告ができるように、わたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされる、陽一先生から教えて頂いた道を希望をもって歩んで行きたいと思います。

思いを馳せると陽一先生への感謝は尽きません。ひとときのお別れも、喪失感に打ちのめされますが、先生の愛唱讃美歌「くすしきみ恵み」を力一杯歌いました。喜びあふるる、み国にてあいまみえることができることを信じて尽きせぬ謝辞を終わります

相模原南教会員 おほらやすお

略歴は以下の通りです。

- 1923年（大正12年）2月2日 滝沢四郎牧師、はる夫妻の長男として、父の勤務先、長野市振徳館（メソジスト教会）に生まれる。
- 1933年（昭和8年）下谷区谷中小に転校（四郎牧師：日暮里教会）
- 1942年（昭和17年）東京帝国大学文学部英吉利文学科に入学
- 1943年（昭和18年）学徒出陣で12月徴兵され武山海平団に入団
- 1944年（昭和19年）海軍通信学校に入学、12月海軍少尉
- 1945年（昭和20年）10月青山学院中学部英語教諭
- 1947年（昭和22年）日本神学専門学校（現東神大）英語講師、11月神奈川教会伝道師（教区総会准允）
- 1949年（昭和24年）教団留学生試験合格、南メソジスト大神学部
- 1951年（昭和26年）2年の米国SMU留学終了後帰国
- 1952年（昭和27年）5月近藤治枝（神奈川教会）と結婚。9月下谷教会牧師
- 1953年（昭和28年）長男光一誕生
- 1955年（昭和30年）長女 香誕生
- 1961年（昭和36年）神奈川教会牧師
- 1975年（昭和50年）鶴見大学文学部教授、鎌倉教会牧師
- 1978年（昭和53年）上鶴間伝道所（現相模原南教会）牧師
- 1988年（昭和55年）相模原南教会会堂改築
- 1991年（平成3年）4月川島堅二牧師招聘に伴い牧師辞任

1993年(平成5年) 鶴見大学定年、名誉教授
1999年(平成11年) 相模原南教会牧師代務者
2007年(平成19年) 前田真孝牧師招聘に伴い、辞任、牧会を終了
2011年、ダイヤモンド婚。2010年にはひ孫も与えられ、
2013年1月7日 ハルエ夫人召天(享年81才)、透析開始
2019年 陽一先生 (腎不全、多臓器不全)

司 式 日本キリスト教団 相模原南教会

一宮 秀禎牧師

奏 楽 一宮 英子

| | | |
|------|--------------------|------|
| 前 奏 | | 一同黙祷 |
| 讃美歌 | 4 5 1 | 一同 |
| 聖 書 | マタイによる福音書 6章25-34節 | |
| 祈 祷 | | |
| 主の祈り | | 一同 |
| 讃美歌 | 4 6 3 | 一同 |
| 謝 辞 | | 小原靖夫 |
| 式 辞 | | 一宮牧師 |
| 讃美歌 | 2 1 8 | 一同 |
| 頌 栄 | 2 7 | 一同 |
| 終 祷 | | |
| 後 奏 | | 一同黙祷 |

挨 拶 遺族代表

献 花 告 別 4 6 0、4 6 3、4 5 1

来月号から謝辞本文の下線部分について解説します。